

建設時評

よくできた郊外住宅地

東北大学 災害科学国際研究所
准教授 平野勝也

津波被災地では、ようやく、いくつかの集団移転地で家屋が建ちはじめ、街の再興が始まっている。中にはほとんど家屋まで完成している事例もある。先日、遠方より後輩が来る機会があり、そうした先行事例を案内して回ったところ、彼の素朴な感想は、「よくできた郊外住宅地ですね」であった。言われてみれば確かにそうである。

こうした集団移転地は、様々な工夫を凝らした住宅地ではあるが、元々の集落とは似ても似つかない郊外住宅地そのものである。筆者自身は、発災後、再興する街が「住宅展示場の様にならないように」と、肝に銘じて関わってきた。住宅展示場の様に、ハウスメーカーが自社の個性を様々アピールするような街並みではなく、住民達で協議しながら、落ち着いた街並みを創っていることが多いし、街区的设计や集会所の配置にも一工夫も二工夫もあり、さすがに住宅展示場の様には見えないのだが、新しく立ち上がった街は、確かによくできた郊外住宅地そのものである。

* * *

郊外住宅地は、庭付き一戸建てという庶民

の憧れを実現する場所として、様々な進歩を続けてきた。高度成長期には、経済効率だけを重視した短冊形の街区割りがほとんどだった郊外住宅地は、その後、T字交差点を主体として出会い頭事故を軽減したり、地区集散路を導入し通過交通を排除して静かな環境を作ったりと、郊外住宅地設計の根幹をなす道路網だけでも、随分と改良がなされてきた。また、分筆が将来とも発生しないような宅地割りも開発し、それが標準化していった。さらには、緑化の効果的方法や景観の統一・規制などとあいまって、閑静で緑豊かな郊外住宅地はできあがってきたと言えよう。もちろんそれとともに、ハウスメーカーがこぞって、庭付き一戸建ての様々な住宅モデルを世に送り出し、住宅そのものも大きく進歩してきた。

一方、既成市街地の住宅はどうであったか。都心近辺の高層・超高層マンションは、近年、大病院に近い都心移住を考える高所得な高齢者や、夫婦ともに働いており、仕事上都心に住む利便性を求める若い世代には人気のようである。こうした動きは、コンパクトシティの観点からは、良いことと言ふことになるであろう。しかし、たとえばソウル市街地に立ち並ぶ超高層マンション群を見るにつけ、その人間性の希薄さに背筋が寒くなった覚えのある筆者には、とても住宅の理想像とは言えない代物である。もちろん、高層・超高層マンションの耐用年数が来たときに、通常管理組合の資本規模で、建て替えを実施できるのかという、現実的かつ深刻な問題もあるのだが。

もう20年以上前、学生時代に東京の下町を研究室の皆で歩くことがあった。その折に、師匠がふと「こうした下町にふさわしい近代的な住宅を提案できなかった建築の責任は重い」といった主旨のことを、ぼつりと呟いたことを思い出す。ちょうどその下町辺りでは、郊外住宅地の庭付き一戸建てとして建てるよ

うな建物を、狭小敷地に無理して建てた結果、住環境としても、街並みとしても問題のある状況が見え隠れしていた。それだけではない、4m接道義務により路地の魅力も壊れゆく運命にある。

考えてみると、この国は高度成長期以降、半世紀もの間、郊外住宅地の庭付き戸建て住宅の他に、良好な住宅の理想像を持ってこなかった様に思う。理想像と言うには語弊が大きすぎるが、強いて言えば、先述の都心に建つ高層・超高層マンションは、庶民の憧れではあるのかもしれない。しかし、その二つだけが憧れの住宅というのでは、あまりに空虚である。もっと多様な理想の住宅がなければ、薄っぺらな街しかできないのではないだろうか。下町の魅力が詰まった東京の月島界隈から見上げる超高層マンション群という異様な風景を見る度に、そんなことを思うのである。都市に関わる専門家は、もっと既成市街地や中心街における住宅のあり方を模索し、計画技術として大成していく必要がある。郊外住宅地も、高層・超高層マンションも、ある意味人口増加の受け皿に過ぎないのだ。時代は人口減少である。もちろん需要があるところでは、様々な展開は生まれる。リノベーションまちづくりが脚光を浴びたり、三階建ての町屋型住宅などをハウスメーカーが出すようになったり、着実に市街地の「住宅」については胎動がある。しかし、それだけでは良い街にはなっていない。公共空間のリノベーションがどうあるべきなのか、考えるべきことは枚挙にいとまが無いのだ。

* * *

そもそも「住宅地」という概念は、近代化の産物である。相次ぐ工場の立地、そして激しい人口流入の受け皿として、初めて創られた概念である。近代化以前、住商工は混在・

融合して街を形成していた。津波で被災した漁村集落も、市街地もその多くが近代化以前の街を受け継いで形成されてきた。そうした街を復興する中で、我々専門家が創り出す集団移転地は、結局、新しい集落でも新しい街でもなく、「よくできた郊外住宅地」となってしまう。もちろん歴史を受け継ぐ工夫は随所に見られる。しかし、集団移転というかたちで、住む場所を移してしまう事業においては、その努力には限界がある。それだけでなく、一時期に創る街は、どうしても長い時間をかけて、少しずつ改変されてきた、街や集落の歴史の厚みには敵うはずもないのだ。

都会の郊外住宅地が、できた当初の無機質な街から、手垢がついて人間味が出てくるようになるまで、最低10年くらいはかかる印象がある。しかしそれは、地に足のついていない浮き草暮らしの都会人のなせる技である。すでに住まい始めた高台移転地の先行事例を歩けば解る。確かに「よくできた郊外住宅地」かもしれないが、住む人々は、地に足をつけて自然とともに暮らしてきた人々だ。さっそく地面に手を入れ、庭には野菜が植えてあったり、玄関先には花が植えてあったり、隣近所とも繋がり皆で草刈りしたりが始まっている。彼らにとって、住宅とは寝食だけの場ではないのだ。作業場であり、生産の場であり、そしてコミュニティーの場でさえあるのだ。あつという間に、「よくできた郊外住宅地」は彼らの街として、馴染んでいくのではないかと、そんな風にも思える。

今年度、多くの集団移転地の造成が完成し、新しい街が立ち上がっていくだろう。その多くが被災者の方々の手垢で染まって、味わい深い街になっていく、そんな過程もつぶさに見守っていきたく、そう思っている。「よくできた郊外住宅地」しか創れなかった、責任を感じながら。